

グリーンフイング・メモ

限定戦争とエスカレーション

理論研究部社会経済研究室 川村 幸城

1 はじめに

冷戦初期に米国で発展した「限定戦争」(limited war)論は、東西冷戦構造のもとで超大国同士の全面核戦争を回避するため、地域紛争をいかに管理するかという観点から武力行使の目的と手段を制限し、紛争のエスカレーションを制御することに主眼が置かれた。その後、米ソ間で核の均衡が成立し、核の使用が現実的オプションとなり得ない時代になると、第三世界への軍事介入を対象に、通常戦力をいかに効果的に運用するかという観点から、紛争一般に内在するエスカレーションを含めた議論が主流となる。このように大国間の直接対決を回避するという本源的な概念から、大国と中小国(非核保有国)との非対称紛争に焦点を移してきた限定戦争論が、近年の国際的危機(ウクライナ危機や南シナ海の動向)を背景に、再び核保有の地域大国を対象とした危機管理もしくは武力行使の形態として注目されるようになっている。

本稿では限定戦争とエスカレーションとの関係に注目し、エスカレーションの制御もしくは発生してしまった後の対応の成否が限定戦争の結果(パフォーマンス)を大きく左右する要因ではないかという筆者の問題意識に沿って、主に米国の事例を取り上げながら検討してみたい。

2 限定戦争とは

限定戦争の先駆的研究者であるロバート・E・オズグッド(Robert E. Osgood)は、限定戦争の本質を目的と手段の制限性にあるとし、「対立する者同士が相互破壊に至らず交渉による決着を図るため、相互に抑制された範囲内で段階的な軍事的反応を媒介としながら駆け引きする紛争」と定義した。朝鮮戦争において中国東北部への原子爆弾の使用を訴え、大統領に解任されたダグラス・マッカーサー(Douglas MacArthur)将軍に象徴されるように、戦争はいったん開始されるとそれ自身が「絶対的」形態に向かってエスカレートする固有の力学に支配される。そうしたエスカレーションの潜在性が大規模戦争(major war)や小規模戦争(small war)とは区分される限定戦争の最大の特徴である。

武力紛争のエスカレーションは冷戦構造に固有の現象とは限らない。リチャード・スモーク(Richard Smoke)は、19世紀のクリミア戦争、普墺戦争、普仏戦争、20世紀のスペイン内戦など大国が関与した事例を観察し、「一般的にエスカレーションは、限定戦争一般に固有の現象である……ただ、限定戦争が静態的な用語であるのに対し、エスカレーションは動態的な用語である」と指摘した。こうした視点からオズグッドやスモークをはじめ近年までの諸研究を総括すると、エスカレーションの発現形態は、①「垂直的(vertical)」(戦闘の強度)、②「水平的(horizontal)」(第三者介入による交戦者数や地理的範囲の拡大)、③「長期化(durational)」(紛争期間)の3つに区分することができる。

また、敵国軍隊の打倒や本土占領による「決定的勝利」が明白な大規模戦争と異なり、目的と手段を制限した限定戦争においては勝利の定義が曖昧になりやすい。このため戦略研究の分野では、限定戦争のパフォーマンスを測る基準として、国家が定めた政治目的の達成度から評価する方法が定着している。すなわち、湾岸戦争のように政権が掲げた政治目的を達成できたケースは成功例とみなされ、反面、朝鮮戦争やヴェトナム戦争のように目的を果たせないまま休戦協定を結んだケース、あるいはレバノン介入やソマリア作戦のように一方的撤退を余儀なくされたケースはしばしば軍事介入の失敗例とみなされてきた。

3 エスカレーションと限定戦争のパフォーマンス

上述したエスカレーションの3つの発現形態を、第2次世界大戦以降に米国が関与した限定戦争の事例と重ね合わせてみると、エスカレーションの制御とパフォーマンスとの間には一定の相関関係があることが浮かび上がる（下表参照）。

例えば、朝鮮戦争において、米国は北朝鮮軍を38度線以北に撃退し、中国国境付近まで追い詰めたものの、中国軍の大規模な介入を招き、その後1953年まで続く膠着状況に陥った（②③の発現）。ヴェトナム戦争では、周到な情報・外交活動により中国軍の本格介入を未然に防止した（②の回避）。しかし、北爆から地上軍増派への作戦の段階的拡大は、戦費と犠牲者の増大をもたらした一方、民族解放戦線を鎮圧することができず、紛争は長期化した（①③の発現）。1982年のレバノン介入では、内戦の停戦監視とPLO指導部の国外退去を保障するという初期の平和維持目的を達成したものの、イスラエルとレバノンとの和平プロセスを仲介するという野心的な外交政策に転換した結果、シリアが後押しする武装勢力との闘争へと紛争が水平的に拡大・長期化し、米海兵隊は撤退を余儀なくされた（①②③の発現）。

表：エスカレーションの制御と限定戦争の結果

	①垂直的（強度）	②水平的（交戦者・地理）	③長期化（期間）	パフォーマンス
朝鮮戦争	○	●	●	失敗
ヴェトナム戦争	●	○	●	失敗
レバノン介入	●	●	●	失敗
湾岸戦争	○	○	○	成功
ソマリア作戦	●	●	●	失敗
イラク戦争	○	●	●	失敗

凡例： ○ エスカレーションの回避（制御成功） ● エスカレーションの発生（制御失敗）

出典）筆者作成

湾岸戦争ではクウェートからのイラク軍撤退という軍事目的とともに、域内のアラブ諸国やソ連をはじめとする主要国からの支援を引き出すため、大規模な多国籍軍の結成という外交目的が同時に追求された。さらに、紛争をアラブ対イスラエルの対立に転化しようとするサッダム・フセイン（Saddam Hussein）の目論見を阻止し、紛争のエスカレーションを防いだ（①②③の回避）。ソマリアでは、当初の人道支援目的の限定的介入から武装解除と民主国家建設という壮大な国家再建を目指す平和強制任務へと変容を遂げた結果、現地軍閥勢力との激しい戦闘に転化し、米軍は撤退した（①②の発現）。イラク戦争ではフセイン政権の打倒という軍事目的とともに、民主的なイラク国家の建設という外交目的が同時に追求されたものの、達成されたのは前者のみであった。そして通常戦による緒戦での軍事的勝利の後、新たな反乱勢力（スンニ派勢力）の鎮圧や宗派間の内戦に引きずり込まれ、作戦は当初の予想を超えて長期化した（②③の発現）。

このように作戦の展開はエスカレーションを軸に大きく変容し、戦場で軍事的勝利を収めただけでは戦争目的を達成できるとは限らない。そもそもマックスウエル・テイラー（Maxwell D. Taylor）やハーマン・カーン（Herman Kahn）など初期の抑止論者たちが唱えたことは、核戦争を頂点とする「垂直的」なエスカレーションの各階梯において主導権を保持することができれば、紛争を抑止あるいはコントロールできるということであった。そうした「エスカレーション優位（escalation dominance）」が成り立つ条件とは、各階梯において優勢な軍事バランスを保持することにあった。ところが、上述した米国の事例で見たように、実際の紛争の展開は「垂直的」エスカレーションのみでは捉えきれない。

戦闘強度をコントロールしながら当面の作戦を有利に進めていても、第三者の意図を誤認し、予期しな

い「水平的」エスカレーションを招けば、当初の目的の変更を余儀なくされ、作戦のパフォーマンスは損なわれるだろう。また、現代の民主国家では、武力行使の正統性や人的犠牲に対して高度に敏感であり、開戦当初は国民が政治指導者の決断に圧倒的支持を寄せていたとしても、戦闘犠牲者とコスト増大を伴う紛争の「長期化」を招けば、国内世論の支持という変数が軍事作戦の行方に大きく影響する。

また、大国と中小国との非対称紛争では、小国側が生存を賭した総力戦として戦われるのに対し、大国側にとっては自国の生存に対する直接的脅威とはならず、軍事的資源を総動員することは現実には起こりにくい。こうした非対称な利害と動機のもとでは、おのずと現地国と外部から介入する国家との間で暴力のエスカレートを受忍する許容度に違いが生じる。例えば、米軍がソマリアで経験したように、当初は人道支援や治安維持を目的とした軍事活動がいつしか現地武装勢力との激しい戦闘に転化してしまう敷居は「モガディッシュ・ライン」と呼ばれ、冷戦後の平和作戦に潜在するエスカレーションのパターンのひとつとして新たな課題を突き付けた。

4 限定戦争の復活？

欧米の戦略理論家の間では、最近のウクライナ危機を契機にロシアの軍事行動やその背景にある戦略思想を限定戦争の視点から捉えなおそうとする議論が高まっている。最小限の兵力により短期間でウクライナ東部を勢力下に収めたロシアの行動は、首都キエフなど他地域への侵攻の恐れを抱かせることなく、限定的な目的と統制のとれた戦略ドクトリン（ゲラシモフ・ドクトリンともハイブリッド戦とも呼ばれる）の実践例としてその有効性を証明してみせた。

そうした行動の背景には、中・東欧戦域での軍事バランスは限定核・通常戦力ともにロシアに有利な状況にあり、ウラジーミル・プーチン（Vladimir Putin）大統領はNATOの反応を十分予測し、軍事分野ではロシアが「エスカレーション優位」を有するとの判断があったからだとされる。ヤクブ・グリギエル（Jakub Grygiel）は、限定的な一部の地域に対するスピーディかつ抑制の効いた「突きと引き」（jab and pause）の戦略に対抗するには、米国が提供する報復と拡大抑止力に依存した態勢では不十分であり、攻撃側のリスク認識を高め、実際の戦闘では攻撃開始初期に一定のコストを強要できる前方阻止戦略（preclusive strategy）が求められると主張している。さもなければ、現状変更の固定化（既成事実化）を許すばかりか、攻撃側は「エスカレーション優位」に立てる一方で、NATO側は大規模な軍事衝突の引き金となるリスクの高い決断を強いられる立場に置かれる。

アジアに目を向けると、エアシーバトル構想では中国の接近阻止・領域拒否（A2/AD）能力を無力化するために、中国本土に配備されているミサイル発射機、レーダー、指揮統制センターを早期に攻撃することが想定されているが、そこで懸念されるのは、中国側には米軍の攻撃によって無力化される前に先制攻撃を行う誘因が強まり、危機を急激にエスカレートさせかねないという点である。

このように、核武装する地域大国を対象としたとき、にわかに深刻となるのが核の応酬のリスクをはらむ「垂直的」エスカレーションへの懸念である。他方、ウクライナ危機や南シナ海で実践されているのは、伝統的な国家間戦争の発生を回避しながら、現状変更を意図する勢力が既成事実を積み上げることで目的を果たそうとする、いわゆるサラミ戦略である。ローレンス・フリードマン（Lawrence Freedman）は、明白な武力侵略が起こりにくい時代にあって、現状変更を意図する地域大国による新しいタイプの限定戦争を「大規模戦争を引き起こすことなく核的利益を確保する試み」と表現している。それは戦時と平時との峻別が困難なグレーゾーンの領域において、通常戦と非通常戦タイプを組み合わせたハイブリッドな手段が、対外政策の成否を左右するとの時代認識を反映した戦略思想でもある。

冷戦期においては核戦争へのエスカレーションを回避するため武力行使の目的と手段を限定せざるを得ないという戦略的要請から限定戦争の戦略が導入されたのに対し、我々は今、武力行使の目的と手段を限定することによって政治目的の達成が容易となる時代を目の当たりにしている。

5 おわりに

本稿では、第2次大戦以降に米国が関与した限定戦争のパフォーマンスとエスカレーションとの関係について考察し、目的と手段を制限して戦われる限定戦争において、エスカレーションへの対応の可否がどのようにパフォーマンス全体に影響を及ぼすのかについて検討した。特に、初期のエスカレーション論が前提とした「垂直的」エスカレーションのみならず、「水平的」および「長期化」を含めた多面的な視点から限定戦争の展開プロセスを分析することには一定の意義があるといえるのではないかと。

また、近年のロシアや中国による限定戦争の復活とも呼べる新たな展開への対応を考えてみたとき、一つだけ言えることは、目的と手段を抑制することに戦略的優位を見出している国家に対しては、単なる旧来の「垂直的」なエスカレーション管理に回帰するだけでは十分ではないということである。米国のような外部勢力として介入するケースとは異なり、地域大国側が隣接する戦域において局地的な軍事バランス上の優位を獲得した場合、紛争の強度・地理的範囲・時間的タイミングを決定する主導権を確保しやすい反面、外部勢力にとっては全面戦争のリスクを引き起こしかねない難しい選択を迫られるからである。

「米国にとって限定戦争は失敗の代名詞」（Hew Strachan）と評されるほど、限定戦争はその制限性とエスカレーションの多元性ゆえに米国のパフォーマンスを制約する要因であるとみなされてきた。とはいえ、21世紀においてもアフガニスタン、イラク、リビア、そして現在継続中のイスラム国に対する軍事作戦に見られるように、米国にとって「限定戦争は軍事的道具箱（toolbox）の中になくなくてはならない選択肢」（Dominic Tierney）という現実には変わりはない。限定戦争は事態の進展に応じてさまざまな発現形態を見せるエスカレーションを制御しながら遂行されなければならないと、そのためには国家として慎重な舵切りが必要とされる。

主要参考文献

- Graham Allison and Dimitri K. Simes, "Russia and America: Stumbling to War," *The National Interest*, April 20, 2015, <http://nationalinterest.org/feature/russia-america-stumbling-war-12662>, accessed on March 13, 2016.
- Lawrence Freedman, Ukraine and the Art of Limited War, *Survival*, Vol. 56, No. 6, December 2014-January 2015, pp. 7-38.
- Jakub Grygiel and Weaa Mitchell, "A Preclusive Strategy to Defend the NATO Frontier," *The Best Defense*, December 2, 2014, <http://www.the-american-interest.com/2014/12/02/a-preclusive-strategy-to-defend-the-nato-frontier/>, accessed on March 13, 2016.
- Herman Kahn, *On Escalation: Metaphors and Scenarios*, Baltimore: Penguin Books, 1968.
- Forrest E. Morgan et al., *Dangerous Thresholds: Managing Escalation in the 21st Century*, Santa Monica: RAND, 2008.
- Robert E. Osgood, *Limited War: The Challenge to American Strategy*, Chicago: University of Chicago Press, 1957.
- Robert E. Osgood, *Limited War Revisited*, Boulder, CO: Westview Press, 1979.
- Richard Smoke, *War: Controlling Escalation*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1977.
- Hew Strachan, *The Direction of War: Contemporary Strategy in Historical Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Dominic Tierney, *How We Fight: Crusades, Quagmires, and the American Way of War*, New York: Little, Brown and Company, 2010.

(2016年4月7日脱稿)

本稿の見解は、防衛研究所を代表するものではありません。無断引用・転載はお断り致します。
ブリーフィング・メモに関するご意見・ご質問等は、防衛研究所企画部企画調整課までお寄せ下さい。
防衛研究所企画部企画調整課

外 線 : 03-3713-5912

専用線 : 8-67-6522、6588

FAX : 03-3713-6149

※防衛研究所ウェブサイト : <http://www.nids.go.jp>